

ビジネス実務総論		担当教員	おおにししんご 大西新吾
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

企業を中心とする営利活動であれ、行政やボランティア等の非営利活動であれ、その諸活動を捉えようとするなら、様々な角度からのアプローチが可能である。しかし、ビジネス「実務」に限定するなら、その考察領域はいくぶん狭められる。ここでは、ビジネス実務の視点から、組織システムの理解を通じて実践的なビジネス実務能力が発揮できるような考え方や技術を学ぶことをねらいとする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 ビジネス実務とは
- 第 2 回 職業観と企業・社会
- 第 3 回 企業組織と業務の流れ
- 第 4 回 仕事遂行上の基本姿勢
- 第 5 回 計画・スケジュールの立案と予算管理
- 第 6 回 ビジネス実務と経済知識（1）
- 第 7 回 ビジネス実務と経済知識（2）
- 第 8 回 ビジネス実務と法律知識（1）
- 第 9 回 ビジネス実務と法律知識（2）
- 第 10 回 ビジネスと心理（1）
- 第 11 回 ビジネスと心理（2）
- 第 12 回 チームワークと人間関係
- 第 13 回 ビジネス会話—アクティブ・リスニング
- 第 14 回 ビジネス会話—効果的な話し方
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験(90%)、レポート等の提出(10%)で評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教 材

授業中に配布するプリント。

[5] 参考図書

- 全国大学・短期大学実務教育協会『ビジネス実務総論』（紀伊国屋書店）
- 森脇道子編著『ビジネスシリーズ ビジネス実務総論』（実教出版）
- 福永弘之編著『ビジネス実務総論』（樹村房）
- 森貞俊二編著『基礎ビジネス教本』（嵯峨野書院）

ビジネス実務演習		担当教員	こうのひさこ 河野久子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

ビジネスワーカーとして、社会人として、自分の能力を最大限に生かし、期待される人材となるために、必要な知識と技能を総合的に学習する。特に前半は仕事の基本・ビジネスマナーの対人系を、後半はビジネス文書・ビジネス常識の文書系を中心に演習を行う。

[2] 授業の計画

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 第 1 回 ・会社とは | 第 16 回 ・接遇業務・来客対応 |
| 第 2 回 労働と基本姿勢 | 第 17 回 訪問・紹介 ビデオ |
| 第 3 回 ・ビジネス業務の基礎 | 第 18 回 ・ビジネス文書 |
| 第 4 回 指示と報告の仕方 ビデオ | 第 19 回 社内文書 |
| 第 5 回 指示と命令の受け方 | 第 20 回 社外文書 |
| 第 6 回 職場の人間関係 | 第 21 回 社外文書 |
| 第 7 回 就業中のマナー・身だしなみ | 第 22 回 ビジネスと通信事務① |
| 第 8 回 話し方の基本 | 第 23 回 ビジネスと通信事務② |
| 第 9 回 ことばづかい ビデオ | 第 24 回 ・ビジネス社会と会議 |
| 第 10 回 ことばづかい | 第 25 回 情報収集 |
| 第 11 回 ことばづかい | 第 26 回 ファイリング |
| 第 12 回 電話応対・かけ方 | 第 27 回 表・グラフの集計 |
| 第 13 回 電話応対・うけ方 ビデオ | 第 28 回 ・環境整備 |
| 第 14 回 電話応対・総合 | 第 29 回 ・まとめ・書類の整理
(袋とじの実習) |
| 第 15 回 まとめ・書類の整理
(袋とじの実習) | 第 30 回 ビジネスと通信事務③
・まとめ |

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。

試験 70 点、記述式 小テスト 10 回 30 点、欠席、遅刻、早退は減点の対象として評価する。

[4] 教 材

資料をプリントして配付する。

[5] 参考図書

必要に応じて指示する。

レクリエーション理論 (幼児教育学科)		担当教員	まる やま のり こ 円 山 紀 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期又は後期	選択

[1] 授業のねらい

憲法の保証する「健康で文化的な生活」の実現ともいえるレクリエーション。より楽しく生きたいと願う人間の基本的欲望に根ざす行為であるレクリエーション。

その理論について、基礎的理解を持ち、楽しさや、生きるよろこびも人々に伝え支援することが出来るレクリエーション・インストラクター(日本レクリエーション協会認定公認指導者)の養成を計る。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 レクリエーションとは？
- 第 2 回 レクリエーション運動の歴史とその背景
- 第 3 回 レクリエーション運動を支える制度
- 第 4 回 レクリエーションインストラクターの役割
- 第 5 回 ライフスタイルとレクリエーション
- 第 6 回 少子化の課題に向けた支援
- 第 7 回 個人・集団環境への働きかけ
- 第 8 回 地域とレクリエーション
- 第 9 回 レクリエーション事業とは
- 第 10 回 レクリエーションの展開方法
- 第 11 回 プログラムの組み立て方
- 第 12 回 事業計画（市民を対象とした事業のつくり方）
- 第 13 回 手作りイベントでの応用
- 第 14 回 レクリエーション活動の安全管理の考え方（事故・事件への対応）
- 第 15 回 起こったときの対応

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

試験 70 点 記述式

レポート 30 点 1 回 10 点×2 回

欠席、遅刻、早退及び授業の進行の妨げになる行為は減点する。

[4] 教 材

『レクリエーション支援の基礎』（日本レクリエーション協会）

レクリエーション実技 (幼児教育学科)		担当教員	おおくぼ いく こ 大久保 郁 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	1 単位	2 年次前期又は後期	選択

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

レクリエーションとは、より楽しく生きたいと願う人間の基本的欲求に根ざす行為である。本授業では、ホスピタリティートレーニング・アイスブレーキングからなる「コミュニケーションワーク」、「支援実習」を中心に演習を行いながら、レクリエーションの本質を理解、学習していく。同時に、人々がレクリエーション活動を通してより良い生活ができるように支援していくためのレクリエーション・インストラクターの養成を図ることを目的とする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オリエンテーション/出会い
- 第 2 回 アイスブレーキングを体験する
- 第 3 回 アイスブレーキングの素材の展開法
- 第 4 回 アクティビティの展開方法
- 第 5 回 段階的アレンジの方法
- 第 6 回 段階的アレンジの指導実習
- 第 7 回 段階的アレンジの評価
- 第 8 回 段階的アレンジの反省
- 第 9 回 表情・話し方トレーニング
- 第 10 回 自己表現トレーニング
- 第 11 回 両面通行のコミュニケーション法
- 第 12 回 対象者にあわせたレクリエーション・ワークの基本技術
- 第 13 回 目的に応じたプログラムの構成方法
- 第 14 回 目的に応じたプログラムの指導実習
- 第 15 回 目的に応じたプログラムの指導実習評価反省

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 実技が中心となるため、授業期間中に実技テストを行なう。
 実技試験 50 点、レポート 20 点、授業参加態度 30 点の割合で評価する。
 また、欠席、遅刻・早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

『レクリエーション支援の基礎』（日本レクリエーション協会 2007）

[5] 参考図書

随時指示する。

レクリエーション実技 (音楽療法コース)		担当教員	おおくぼ いく こ 大久保 郁 子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実技	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

レクリエーションとは、より楽しく生きたいと願う人間の基本的欲求に根ざす行為である。本授業では、ホスピタリティートレーニング・アイスブレイキングからなる「コミュニケーションワーク」、「支援実習」を中心に演習を行いながら、レクリエーションの本質を理解、学習していく。同時に、人々がレクリエーション活動を通してより良い生活ができるように支援していくためのレクリエーション・インストラクターの養成を図ることを目的とする。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オリエンテーション/出会い
- 第 2 回 アイスブレイキングを体験する
- 第 3 回 アイスブレイキングの素材の展開法
- 第 4 回 アクティビティの展開方法
- 第 5 回 段階的アレンジの方法
- 第 6 回 段階的アレンジの指導実習
- 第 7 回 段階的アレンジの評価
- 第 8 回 段階的アレンジの反省
- 第 9 回 表情・話し方トレーニング
- 第 10 回 自己表現トレーニング
- 第 11 回 両面通行のコミュニケーション法
- 第 12 回 対象者にあわせたレクリエーション・ワークの基本技術
- 第 13 回 目的に応じたプログラムの構成方法
- 第 14 回 目的に応じたプログラムの指導実習
- 第 15 回 目的に応じたプログラムの指導実習評価反省

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
 実技が中心となるため、授業期間中に実技テストを行なう。
 実技試験 50 点、レポート 20 点、授業参加態度 30 点の割合で評価する。
 また、欠席、遅刻・早退を減点の対象とする。

[4] 教 材

『レクリエーション支援の基礎』（日本レクリエーション協会 2007）

[5] 参考図書

随時指示する。

レクリエーション現場実習 (幼児教育学科)		担当教員	ひら おか よし み 他 平 岡 芳 美
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	1 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

レクリエーション現場実習は、「理論」と「実技」の学習をふまえて、実際の指導場面を体験学習していくものである。

現場実習は「スタッフ参加」と「事業参加」の2つの領域から履修する。

「スタッフ参加」は「教育実習Ⅰ」をあてる。

「事業参加」は日本レクリエーション協会、都道府県レクリエーション協会、市町村レクリエーション協会、および各協会の加盟団体が主催している事業などに2回以上参加する。

[2] 授業の計画

「スタッフ参加」

「教育実習Ⅰ」の中でレクリエーション支援に関わる体験を組み入れる。

- ①実習現場での理論と実技の学習内容の振り返りと確認
- ②コミュニケーションワークの実践
- ③対象者の把握
- ④プログラム・事業の計画
- ⑤レクリエーション支援の準備
- ⑥ " " の実施
- ⑦ " " の評価

「事業参加」

地域において、実施されているレクリエーション支援に関わる事業に2回以上参加をする。具体的な事業名は以下の通りである。

- ・全国一斉あそびの日キャンペーン事業
- ・レクリエーション大会
- ・研究大会
- ・スポレク祭
- ・CG大会
- ・市民レクの集い
- ・ニュースポーツ体験
- ・ニュースポーツ大会
- ・レッツダンスのつどい
- ・オリエンテーリング大会
- ・福井県民体育大会健民スポーツの部
- ・福井県ペタンク大会
- ・フォークダンスフェスティバル

など

[3] 評価の方法

実習評価と「事業参加」のレポートで評価する。

[6] その他

事業参加を実施する時は、短大で用意した「現場実習事業参加記録カード」を持参する。

レクリエーション現場実習 (音楽療法コース)		担当教員	の 野 尻 恵美子 他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	1 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

レクリエーション現場実習は、「理論」と「実技」の学習をふまえて、実際の指導場面を体験学習していくものである。

現場実習は「スタッフ参加」と「事業参加」の2つの領域から履修する。

「スタッフ参加」は「音楽療法実習Ⅰ」をあてる。

「事業参加」は日本レクリエーション協会、都道府県レクリエーション協会、市町村レクリエーション協会、および各協会の加盟団体が主催している事業などに2回以上参加する。

[2] 授業の計画

「スタッフ参加」

「音楽療法実習Ⅰ」を通してレクリエーション支援に関わる体験を組み入れる。

- ①実習現場での理論と実技の学習内容の振り返りと確認
- ②コミュニケーションワークの実践
- ③対象者の把握
- ④音楽療法の実践計画
- ⑤音楽療法の実践準備
- ⑥音楽療法の実践
- ⑦実践の評価

「事業参加」

地域において、実施されているレクリエーション支援に関わる事業に2回以上参加をする。具体的な事業名は以下の通りである。

- ・全国一斉あそびの日キャンペーン事業
- ・レクリエーション大会
- ・研究大会
- ・スポレク祭
- ・CG大会
- ・市民レクの集い
- ・ニュースポーツ体験
- ・ニュースポーツ大会
- ・レッツダンスのつどい
- ・オリエンテーリング大会
- ・福井県民体育大会健民スポーツの部
- ・福井県ペタンク大会
- ・フォークダンスフェスティバル

など

[3] 評価の方法

実習評価と「事業参加」のレポートで評価する。

[6] その他

事業参加を実施する時は、短大で用意した「現場実習事業参加記録カード」を持参する。

障害児保育		担当教員	あお い ゆう き 青 井 夕 貴
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期又は後期	選択

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

障害の有無に関わらず、広い視野から保育・援助を実施するためには、基礎となる知識やスキル、さらに自分なりの障害観・保育観が不可欠であると考えます。本授業では、子どもにかかわる心身の障害について基本的知識を身につけると共に、障害への理解や捉え方について考える作業を行いたい。その上で、障害児および保護者への個別援助の過程やあり方、施設内での支援、地域および外部の専門機関との連携などについて学び、障害児保育について柔軟な理解を深めたい。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 オリエンテーション～授業の目的と計画、障害児保育を支える理念
- 第 2 回 障害児を取り巻く環境の現状と課題
- 第 3 回 障害の理解と援助～知的障害
- 第 4 回 障害の理解と援助～発達障害 I
- 第 5 回 障害の理解と援助～発達障害 II
- 第 6 回 障害の理解と援助～情緒障害
- 第 7 回 障害の理解と援助～視覚・聴覚障害
- 第 8 回 障害の理解と援助～言語・運動障害
- 第 9 回 障害の理解と援助～その他
- 第 10 回 保育所・幼稚園における援助 I
- 第 11 回 保育所・幼稚園における援助 II
- 第 12 回 施設における援助
- 第 13 回 家庭での育ちと家族への援助
- 第 14 回 地域との連携と援助
- 第 15 回 まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
提出課題 40%、試験 30%、受講態度等 30%をもとに、総合評価する。
欠席や遅刻、早退は減点の対象とする。

[4] 教 材

尾崎康子，小林真，水内豊和，阿部美穂子編『やわらかアカデミズム・わかるシリーズ よくわかる障害児保育』（ミネルヴァ書房 2010）

[5] 参考図書

必要に応じて授業中に紹介する。

精神保健		担当教員	おと べ たか ゆき 乙 部 貴 幸
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

乳幼児を保育する保育士にとって、乳幼児期に見られる心の病気や問題を理解することは重要である。また、成人の心の健康と乳幼児期の発達などがお互いに影響し合うこともあり、自身の健康を考えることも含めて、乳幼児だけではなく成人の心の病気や問題についても理解しておくことが好ましい。本授業では、代表的な心の病気や問題について、その症状・原因・対応について理解するとともに、その予防法について考えてもらう。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 精神保健とは
- 第 2 回 心の身体的基礎
- 第 3 回 心の病気① 種類と分類
- 第 4 回 心の病気② 代表的な内因性の病気（統合失調症、気分障害など）
- 第 5 回 心の病気③ 代表的な外因性の病気（依存症など）
- 第 6 回 心の病気④ 代表的な心因性の病気（神経症）
- 第 7 回 心の病気⑤ 代表的な心因性の病気（心身症、行動障害）
- 第 8 回 心の病気⑥ 乳幼児期に問題となる心の病気(1)（神経性習癖）
- 第 9 回 心の病気⑦ 乳幼児期に問題となる心の病気(2)（知的障害）
- 第 10 回 心の病気⑧ 乳幼児期に問題となる心の病気(3)（広汎性発達障害）
- 第 11 回 心の病気⑨ 幼児～学童期に問題となる心の病気(1)（注意欠陥多動性障害）
- 第 12 回 心の病気⑩ 幼児～学童期に問題となる心の病気(2)（学習障害）
- 第 13 回 児童虐待の病理
- 第 14 回 母子関係の精神保健
- 第 15 回 精神保健の歴史と制度

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。試験(80%)、授業時に課す課題(20%)により総合的に評価する。()内は、評価に定める比重を表す。欠席・遅刻・早退、および著しく受講態度が悪い場合は減点する。

[4] 教 材

必要に応じて資料を配布する。

[5] 参考図書

- 本城秀次 編『よくわかる子どもの精神保健』（ミネルヴァ書房 2009）
- 山下 格 著『精神医学ハンドブック 第6版』（日本評論社 2007）
- 清水将之 著『子どもの精神医学ハンドブック』（日本評論社 2008）

社会福祉		担当教員	おお せき けん じ 大 関 賢 治
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

少子高齢化や格差の拡大等、現代社会はとても複雑でこれまでに経験したことのない課題が次々に起きてきます。このような社会で生きていくには、私たちの生活を支える社会の仕組みを理解することが必要です。

そして誰もが、一生のうちに何回かいろいろな生活問題に遭遇します。社会福祉は、こうした生活上の様々な問題を解決し、支援するための法律や制度・援助技術についての学問です。本講義では、以上のことを基本として、福祉問題の理解と実践で役に立つ社会福祉の基礎知識を学ぶことを目標としています。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 第 1 章 現代社会と社会福祉（1）
- 第 2 回 第 1 章 現代社会と社会福祉（2）
- 第 3 回 第 2 章 社会福祉の歴史
- 第 4 回 第 3 章 社会福祉制度とその体系（1）
- 第 5 回 改革のグランドデザイン案に関する意見書「生存と魂の自由を」
- 第 6 回 第 3 章 社会福祉制度とその体系（2）
- 第 7 回 第 4 章 社会福祉従事者
- 第 8 回 児童虐待はなぜおきるのか？
- 第 9 回 第 5 章 社会福祉援助技術（利用者との信頼関係を作る）
- 第 10 回 第 6 章 社会福祉の動向（1）
- 第 11 回 第 6 章 社会福祉の動向（2）
- 第 12 回 第 7 章 今後の社会福祉
- 第 13 回 福祉サービスの利用と成年後見制度
- 第 14 回 セイフティーネット ワーキングプアと生活保護
- 第 15 回 ハンセン氏病を知り、偏見や差別をなくそう

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行います。

レポート 45 点、試験 55 点として評価します。

欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為は減点します。

[4] 教 材

新・保育士養成講座編纂委員会/編『新・保育士養成講座 第 1 巻 社会福祉』

[5] 参考図書

印刷物を配布します。

公衆衛生学		担当教員	で 出	ぐち 口	よう 洋	じ 二
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択			
講義	2 単位	2 年次前期	必修			

[1] 授業のねらい

人々の疾病を予防し、健康の保持・増進を図るためには、医療技術の開発のみならず、地域住民の健康教育と健康管理が組織化された地域社会の努力を通じて進められてこそ、はじめて達成可能であり、栄養士や調理師は重要な責務を担っていることを認識させ、現在行われている公衆衛生対策の内容と課題について理解を深める。

[2] 授業の計画

- 第 1 回 公衆衛生活動の特徴と進め方
- 第 2 回 公衆衛生学の歴史と予防医学の考え方
- 第 3 回 衛生行政機構と保健医療制度
- 第 4 回～第 6 回 保健統計と集団の健康指標
- 第 7 回～第 8 回 疫学の考え方
- 第 9 回～第 10 回 母子保健
- 第 11 回 学校保健
- 第 12 回 産業保健
- 第 13 回 成人・老人保健
- 第 14 回～第 15 回 環境保健

[3] 評価の方法

試験成績×課題提出率
授業内容のキーワードを簡潔に文章で説明する課題を 7 回提出する

[4] 教 材

久道茂・鈴木庄亮監修『シンプル衛生公衆衛生学』（南江堂 2011 年）

[5] 参考図書

- 厚生統計協会編『国民衛生の動向 2010/2011 年版』
- 同上『国民福祉の動向 2010/2011 年版』
- 同上『保険と年金の動向 2010/2011 年版』
- 厚生労働省編『国民健康・栄養の現状』第一出版 2010 年
- 環境省編『平成 22 年版環境白書』日経印刷 2010 年
- 沖藤典子著『介護保険は老いを守るか』岩波新書 2010 年
- 東京商工会議所編著『eco 検定公式テキスト改訂 2 版』日本能率協会 2010 年
- 近藤克則著『健康格差社会』医学書院 2005 年
- 津金昌一郎著『がんになる人ならない人』講談社ブルーバックス 2004 年
- 宮里勝政著『タバコはなぜやめられないか』岩波新書 1993 年
- 中村好一著『基礎から学ぶ楽しい疫学』医学書院 2002 年

臨床心理学		担当教員	おと べ たか ゆき 乙 部 貴 幸
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業の目的・ねらい、概要、到達目標

幼稚園教諭や保育士などには、子どもの発達と保護者の子育ての両方を支援することが求められている。本授業では、①代表的な心理学の理論と心理療法の基礎知識、②質問紙調査の意義と方法、の2つを理論と実践の両面から理解することを目標とする。これらの修得を通じて、子ども・保護者とのかかわりにあたっての保育者としての基本姿勢についても考察してほしい。

[2] 授業の計画

- 第1回 オリエンテーション：正常と異常とは
- 第2回 心に関する理論と心理療法①（精神分析理論）
- 第3回 心に関する理論と心理療法①（精神分析療法）
- 第4回 心に関する理論と心理療法②（自己理論）
- 第5回 心に関する理論と心理療法②（来談者中心療法）
- 第6回 心に関する理論と心理療法③（行動理論）
- 第7回 心に関する理論と心理療法③（行動療法）
- 第8回 子どものための心理療法：遊戯療法，絵画療法，箱庭療法
- 第9回 保護者・子ども理解における質問紙調査の意義
- 第10回 質問紙調査の方法論
- 第11回 質問紙の作成・実施時の注意点
- 第12回 質問紙法の実際①
- 第13回 質問紙法の実際②
- 第14回 調査発表・まとめ①
- 第15回 調査発表・まとめ②

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。試験(70%)と調査の実施・発表(30%)により総合的に評価する。()内は、評価にしめる比重を表す。欠席・遅刻・早退、および著しく受講態度が悪い場合は減点する。

[4] 教 材

必要に応じて資料を配布する。

[5] 参考図書

川瀬正裕・松本真理子・松本英夫『心とかかわる臨床心理』(ナカニシヤ出版 2006)
 大石史博・西川隆蔵・中村義之(編)『発達臨床心理学ハンドブック』(ナカニシヤ出版 2005)
 改訂・保育士養成講座編纂委員会(編)『精神保健』(全国社会福祉協議会 2009)

音楽療法実習 I		担当教員	の じり えみこ 野 尻 恵美子
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	3 単位	1 年次後期・2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

音楽療法基礎演習、音楽療法実践で学んだ事を生かし、子ども、高齢者の対象別に、実際にセッションを行う。福祉施設、病院等に直接出かけたり、あるいは対象児が来校する事で行うセッションを通して、障害児および高齢者に対する理解を深めるとともに、実際に体験した事に対し、指導者からフィードバックを得て、セラピストとして大切な知性や感性を伸ばすことを目的とする。同時に実習を通して、基礎的な理論に対する理解力を深めてゆく。

[2] 授業の計画

1. 1年目の後期では

- ・施設などのスタッフとの交渉
- ・対象者との出会い
- ・音楽を通してのふれあいから相手を理解する
- ・指導者の補佐をしながら、対象者を正しく観察する等を主な活動とする。

方法として、子ども、高齢者と、全ての領域の現場を体験するためのローテーションを組み、それぞれ週1日のペースでセッションを行う。見学から始め、ピアノ伴奏などコワーカーを体験し、授業で学んだ理論を、実践する事で再認識する機会とする。最終的にメインセラピストとしてセッション出来るよう、現場での力をつける。

2. 2年目はより深く対象者と関わり理解を深め、メインセラピストとしてそれぞれがセッションの計画を組み、実践をする。更に実際のセッションの記録をもとに、自分の音楽療法について検討し、より効果的な音楽療法について考察する。方法として、希望する一定の対象者を観察、記録し、効果的な音楽療法を模索する。更にその成果を論文にまとめ、発表する。

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実習での対象者との関わり方、音楽療法の技法の選び方、その使い方などを総合的に評価する。また、欠席を減点の対象とする。

[4] 教 材

必要に応じて、随時プリントを配布する。

[5] 参考図書

施設等と相談の上、夏休みなど学生が自主的なフィールドワークとしてセッションすることも可能。